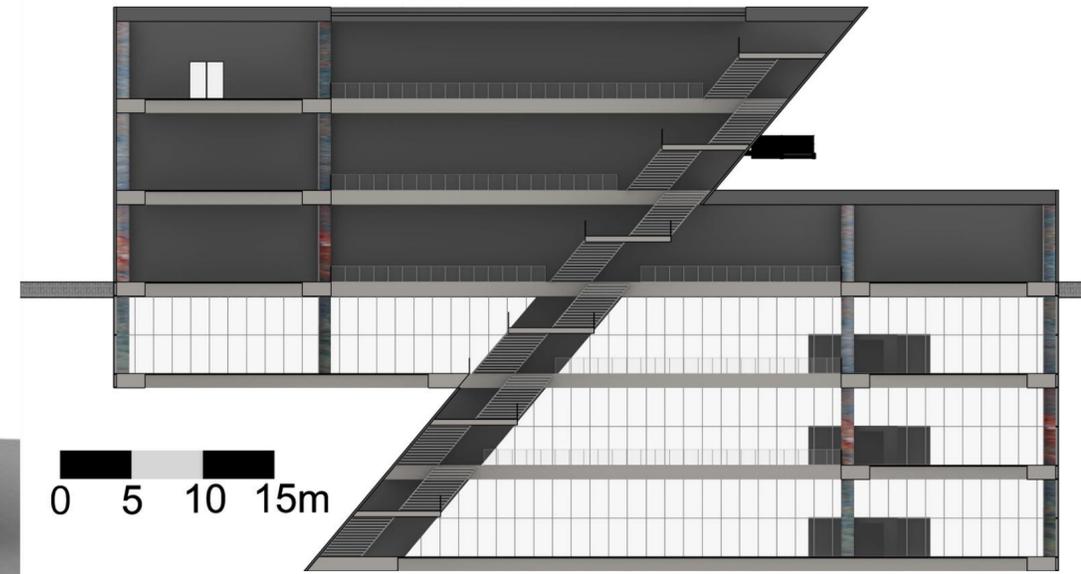
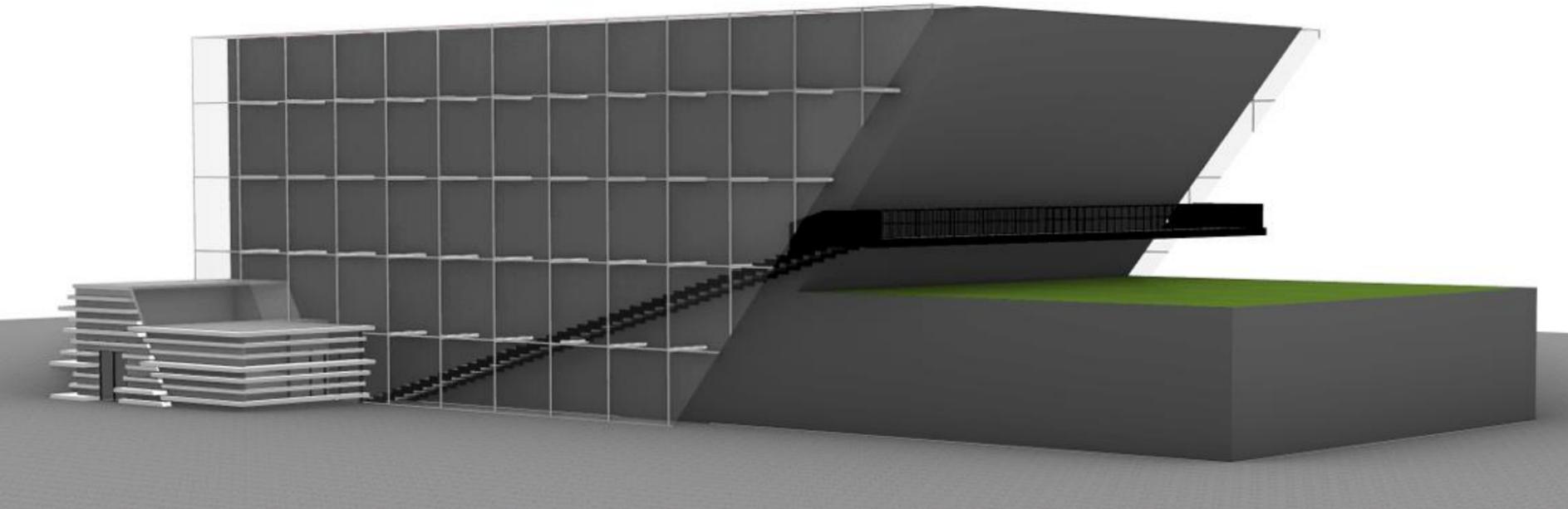
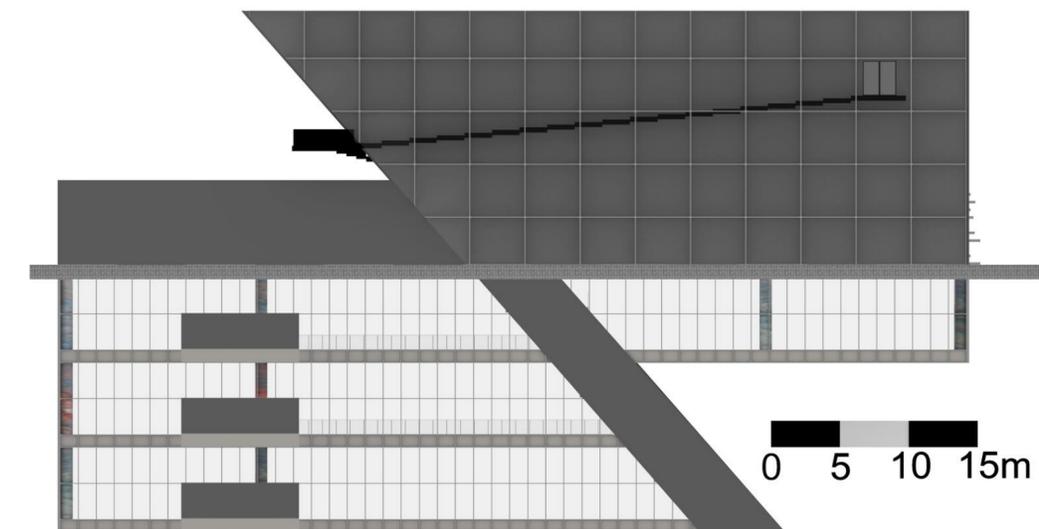
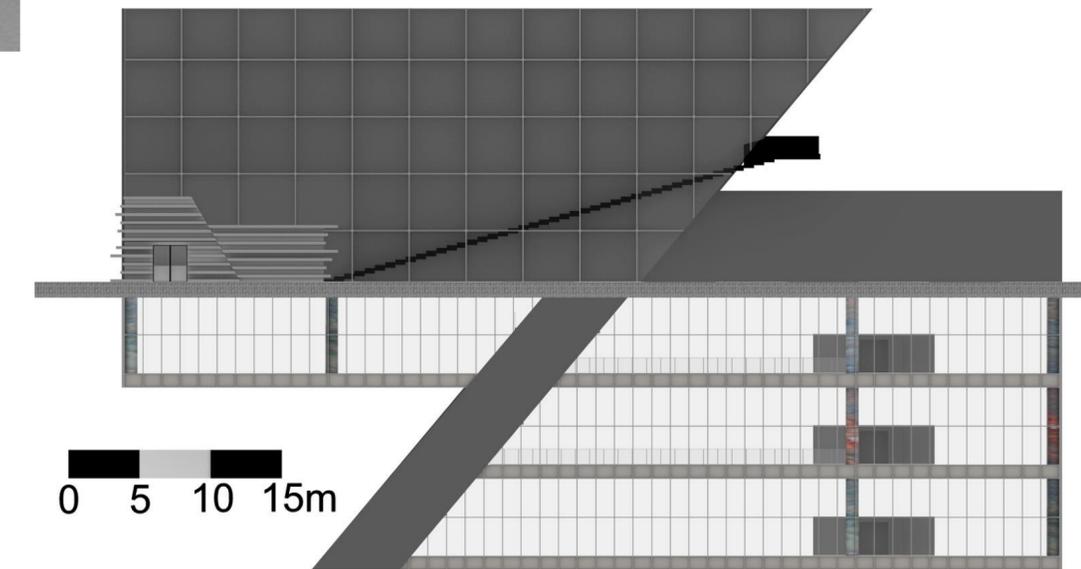
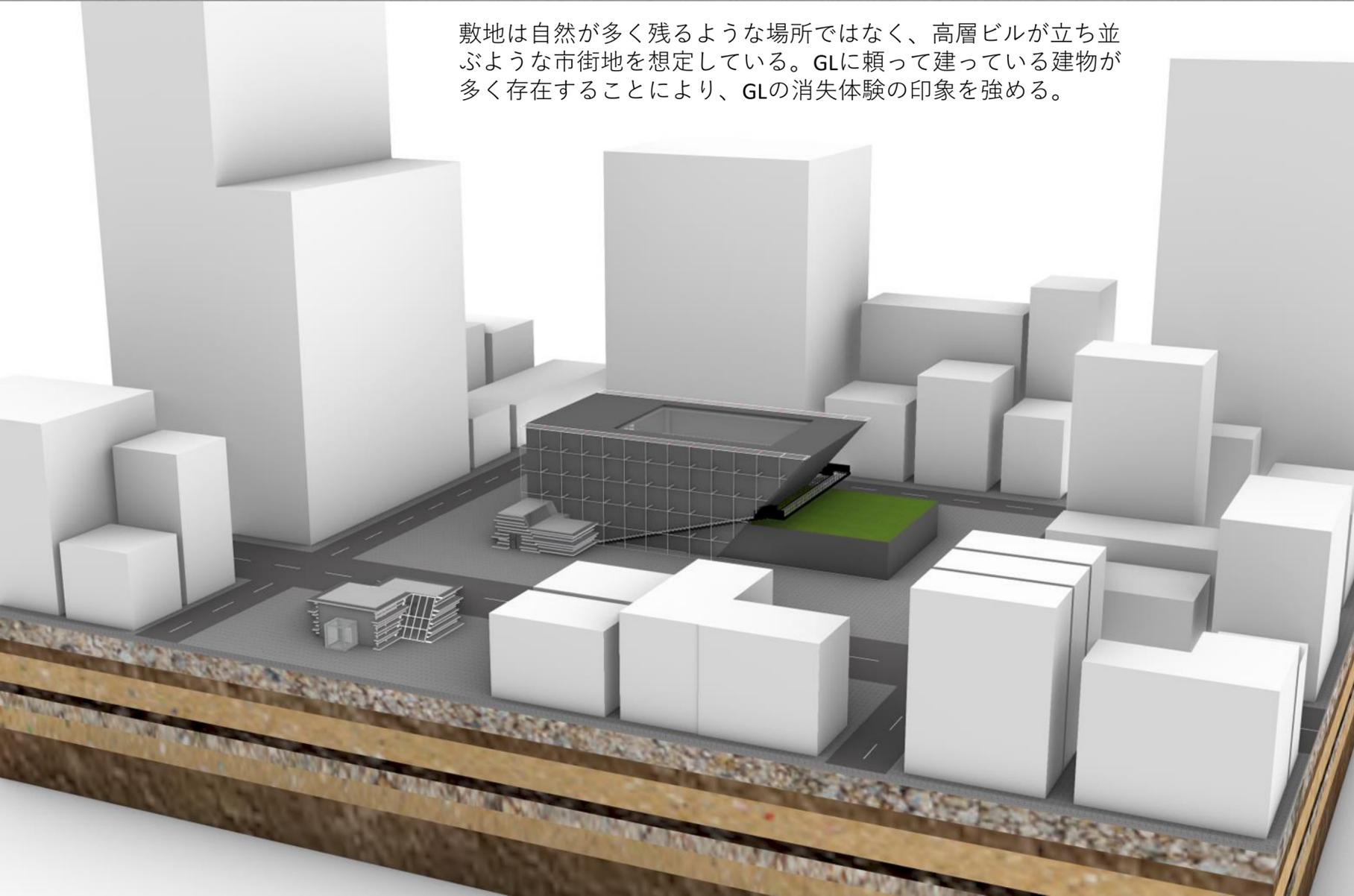


# Ground cancel

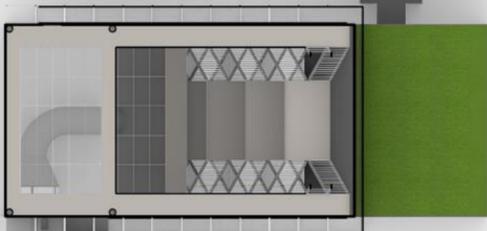
GLとは地球上にあるすべてのものの基準、「大地」である。地球上のあらゆるものがGLに依存している。建築もその例外ではない。しかし人間はGLを軽視し、感謝することを忘れた。我々はこれまでの行為を反省し、向き合い、改善していかなければならない。よって今回我々が提案するのは床をガラスにすることや壮大な吹き抜けを開けることでGLがなくなったような疑似体験により、「展示からだけでなく、建築そのものからもGLについて考える地質博物館」である。大地の歪みである逆断層（本館）、正断層（受付別館）、横ずれ断層（出口館）の形をダイアグラムとし、大地のずれがGLから浮き出し建築となる。本館の上館が人工物、下館が自然を表し断層を使い大地と人間の分断をあらわす。



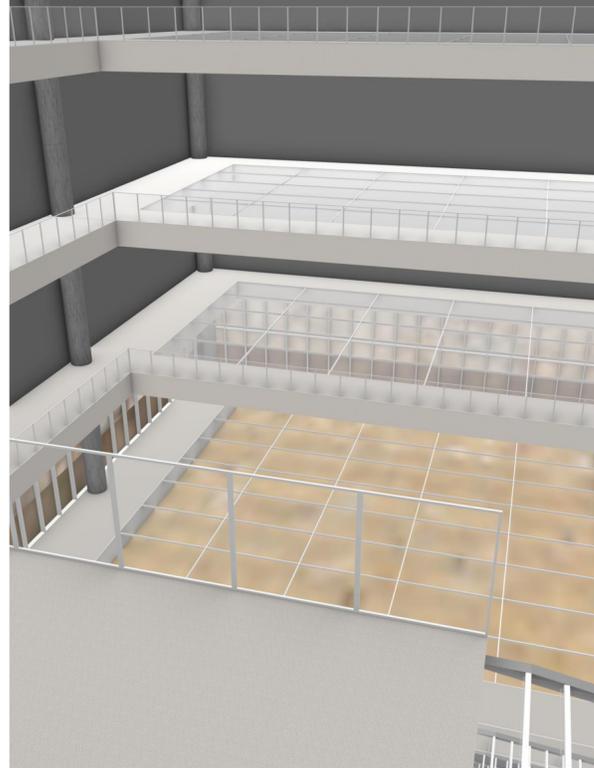
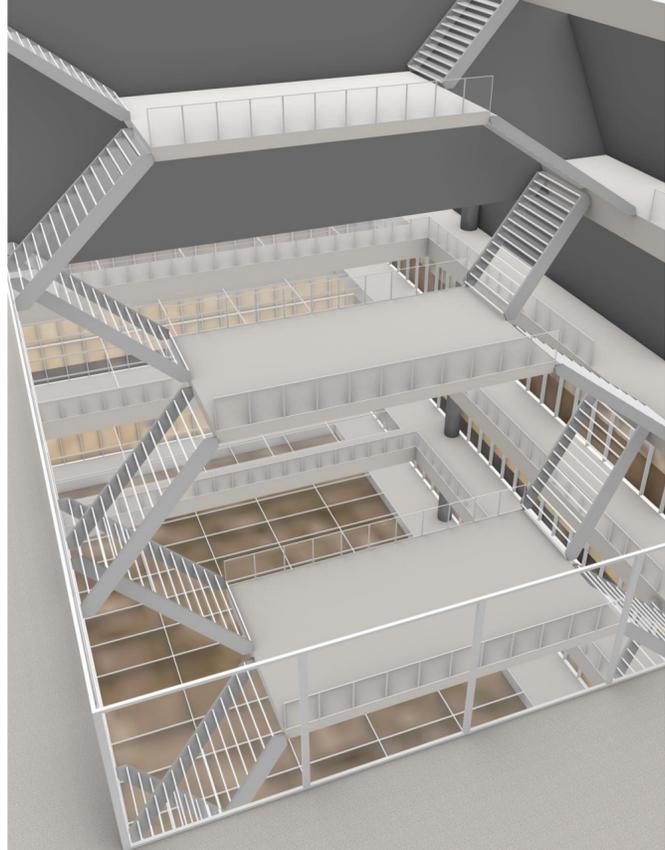
敷地は自然が多く残るような場所ではなく、高層ビルが立ち並ぶような市街地を想定している。GLに頼って建っている建物が多く存在することにより、GLの消失体験の印象を強める。



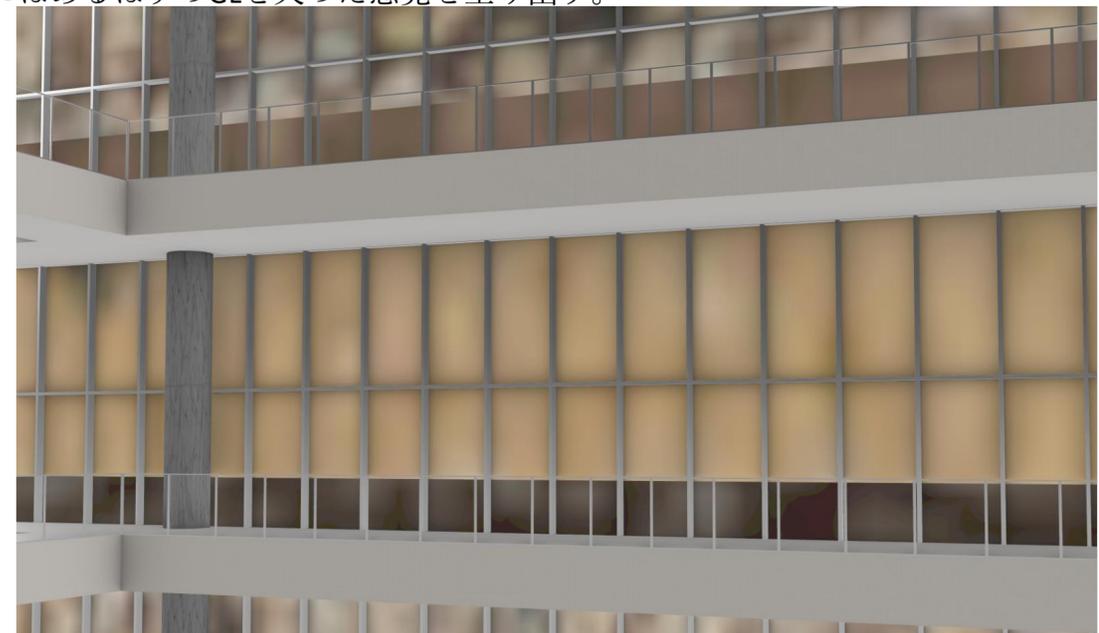
0 5 10 15m



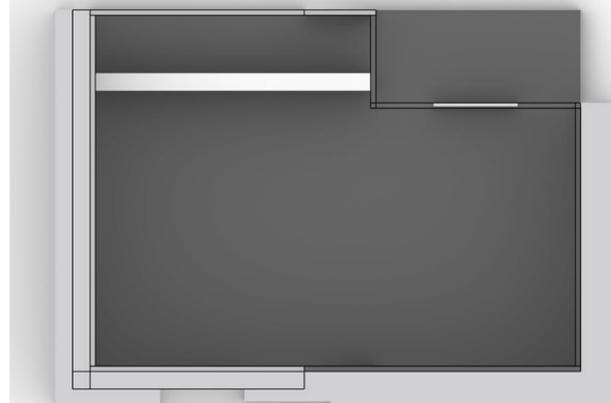
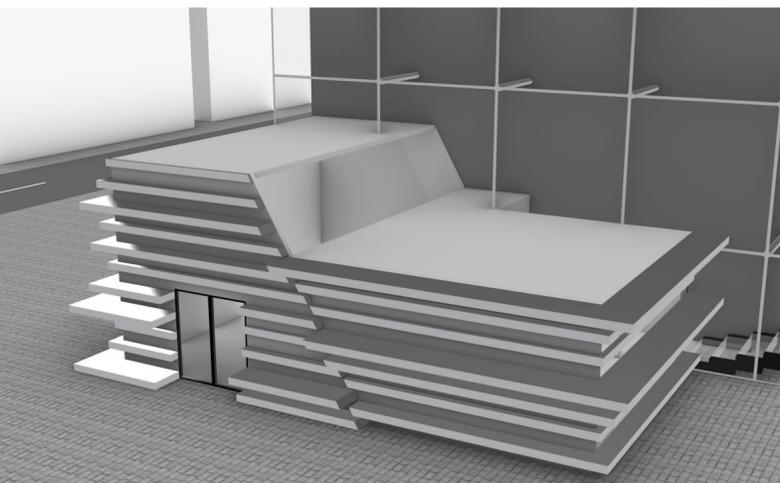
吹き抜けとガラスの床はGLを失ったことを象徴するデザインである。ガラスがある展示スペースより来館者に直感的にGLが消失した場合のイメージを感じてもらおう。斜めになった歪な形が歩行者の違和感と浮遊感を煽り、自然と床へと視線を誘導する。



地上に出ている部分はコンクリートで覆うことで、外の景色を遮断し本来のGLがどこにあったかを認識させないことでGLがなくなった感覚を維持する。外の景色からではなく地上と地下の境目から本来のGLを認識することで実際にはあるはずのGLを失った感覚を生み出す。



**受付館** / 正断層をダイアグラムとしている。建築を取り囲む凹凸は不規則な地層を表しそれを分裂させることで入館者に断層であること表現する。



## ファサード階段

ガラスの囲い断層に寄り添うことを可能とする。自分の足でガラスの階段を上っていくことで、GLから離れていく感覚を自らの足で体験することができる。



**出口館** / 横ずれ断層をダイアグラムとしている。受付館と違い同じ高さにある装飾の壁の幅を同じに設計し、大地はつながっていることを退館者に表現する。本館と出口館を地中トンネルでつなぎ、退館時にもGLを体感できる。

